

総合薬学科は「薬学部」になります

升島 努

薬学6年制に対応して、我が総合薬学科も、平成18年4月から2学科（薬学科（6年制）学生定員38名と薬科学科（4年制）学生定員22名）となり、薬学部としていよいよ独立することになりました。2学科にする文科省との交渉時、最後まで薬学部として独立したいという我々の願いは、素直に文科省には聞き入れて貰えませんでした。「何を今更」、「今まで何度も、医学部の中にある唯一の薬学科と宣伝してきたではないですか」と……。しかたなく、学長が行って、最後の手段を使いようやく実現したものです。

今から思うと、大学院臨床薬学独立専攻を作るとき、そして、医歯薬がごっちゃまぜにされて、大学院大学になりたい一心で医歯薬学総合研究科になる交渉をしたとき、そして、今度の2学科1学部（薬学部）にすると、いつも文科省（当時は文部省）に交渉に行き、ある時は木村学科長（当時）と、ある時は大濱医学研究科長と、そして今回は、大塚学科長と井出先生と、でもいつも帰りには嘆き節でした。文科省は、本当に事なかれ主義で、政治家でも動かさないと、重い腰を上げない存在だと、つくづく腹の立つ存在で、思い起こせば、ガッカリした思い出の連続です。その間、どれだけ、作文や図を作らされたことでしょうか。

ともかく、これで一人前の学部になります。でも、きっと世界一小さい学部です。ですから、みんなで支え合って、みんなの力を合力にして行かなくては、大海に漂う、一艘のあわれな小舟にしかすぎなくなります。どうか、卒業生の皆様も、今まで以上に、応援よろしく御願いたします。

そういえば、4月から学長補佐をやっています。昔からですが、そんなタイトルを気にしたことは無く、その託された機能（外部資金担当）を僕らしく全うし、何かお役に立てばとやっています。この職でやることは、大学の各学部・研究科から出た文科省への大型予算申請（現代教育G P、大学院教育改善プログラムなど）に関し、学内から文科省に出るところの申請書の書き方や、プレゼンのブラッシュアップを淡々と担当しています。月4回位のご奉公でしょうか。各部局の代表者が申請書の内容を発表されるのを聞いて、学長自らコメントをつけられ、その後副学長達がコメントをつけた後、僕が担当者として最も時間を取ってコメントをつけます。その中で最後の僕のコメントが結構的を得ているらしく、後ろで沢山の事務部の方が聞いて居られるのですが、筆頭部長がいつだったか「先生のコメントは聞いていて気持ちがいい、適切で、簡潔で、建設的」と言われ、うれしくなりました。この様な会議に事務部の人たちは沢山後ろに控えておられるのですが、発言の中身からじっと力が見られているんだと身の引き締まる思いでした。僕が入ったせいではないと思いますが、今年は、割にこの種の大型予算が取れていて、大体これは通そうと学長が言われたものは、注力してコメントをつけますので、それらは90%以上通っていると思います。どの部局から出たものも全て文科省に行っているのですが、実は出す時に、これは通りそうだから注力してと目星が既についているのです。この仕事をして、もう一

うれしいのは、通られた部局の部局長だけではなく、その事務のトップの方がわざわざ電話やメールを下さって、「先生のお陰で通りました。」と言って下さる事です。そうではなく、学長以下の総力戦とその部局の成果や基盤があるから通るのですが、その喜びを分かち合えるのはうれしいことです。

同時に、学長、副学長、理事の出る最高会議にもオブザーバーで出席しています。いくらでも発言させて貰えるので、それも事務部の方々が聞いて居られます。大学は結果責任の問われる事の余りない甘い組織だと気付きました。だからなのか、その議論の内容も、だらだらした過程重視の会議が多く、また、みんなが”長”になりたがるのは、結果は問われず、名誉のみが頂けるからでしょうか。これが会社なら、もし製品が売れなければ、社長はクビです。僕は機能を果たす単なる役割の分担にすぎないと思います。例えそれが学長であってもです。だから、やる時はちゃんと公平に丁寧にみんなの希望を大きな形で叶え、組織の未来をもたす役だと思っています。個人の立場とはまったく違う大きな姿のあり方を、今学長補佐になって少しずつ学び始めています。

研究面では、御礼を言いたいスタッフがいます。長谷川教務員です。昨年から本格的に小児外科との共同研究が厚生労働省の班研究で始まりました。赤ちゃんの悲惨なガン「神経芽細胞種」の液クロによるマススクリーニングが過剰診療と中止になり、悪性ガンに選択的な予知につながる新マーカー探索の準備を続けて来ました。実は、偉そうな先端分析だと、やれビデオマススコープだ、1分子イメージングだとやって来ましたが、分析の基礎の基礎である液体クロマトグラフィーは、実際にはやった事はありませんでした。もう研究にならないからと少し思い上がった気持ちがあったのかもしれませんが、しかし、教室の臨床展開を先ずは小さくとも創り上げたいと思った事から、彼女と、会社からやってきた久保田君(D)に、血液や尿中からの分離と質量分析法のカップリングによる分析手法確立を託しました。分析法の構築の際、色々な困難に遭遇しながら、時には、分析が安定しないと涙を見せながらも、カテコールアミンの一斉分析法の確立を曲がりなりにも成し遂げた彼女に、日本マススクリーニング学会から先日優秀論文賞のお褒めが贈られてきました。この論文を教室にとっては初めてのClinical Chemistryに投稿しました。

何せ、彼女は僕よりいつも少し早く、朝7時過ぎには来て、僕が来た時は、まず実験室で実験を始めています。そして、学生の指導もし、更に教室の沢山の雑用も、山田秘書と一緒に引き受けています。この二人は給料の何倍もの仕事をしていてと言っても良いでしょう。

この研究には、この田園通信の産まれた所以である故吉田先生が開発されたprotein-coated ODSを、前処理濃縮に積極的に使わせて貰っています。先生どうか天国から我々のこれからの展開を見守っていて下さいね。

この臨床へのアプローチは、思わぬ副産物を産みました。一つは、これからやろうとしている1細胞レベルまでいけるビデオマススコープで、細胞の前処理濃縮の手法が自由に

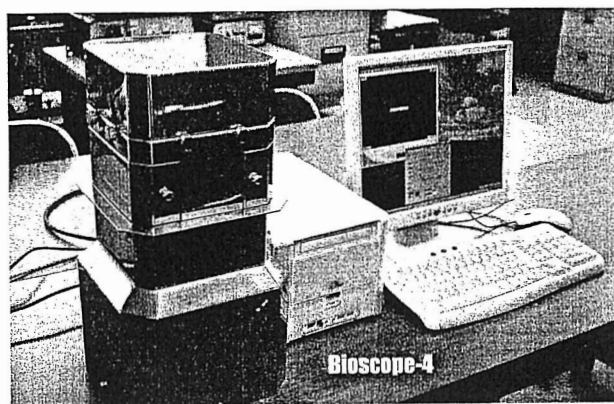
準備できるようになりました。

そして、もう一つは、先日、昭和大学薬学部名誉教授の前田先生に言われて始めて仕方なしに参加した日本マススクリーニング学会でのことです。今、欧米では、我々の予言通り、マススクリーニングで、質量分析法（特にタンデムマス法）が使われ始め、日本がキャッチアップに夢中になっているということを知りました。そして、私が、質問に答えたときに、小児科のお医者様の多いこの学会の理事長（徳山大学副学長黒田教授）以下、質量分析の分かる人がこの学会に欲しかったんだと、皆さんがとても歓迎して下さいました。早速、島根大学の小児科の山口教授（厚生班班長）から、LC-MSでの共同研究を依頼されました。小児科の先生方は皆さんやさしくて素晴らしい方々で、この学会に入会させて貰うことになりました。

ここまで質量分析が見えるようになったのは、パナマから来たG a r y 君の毎日夜遅くまで、一人もくもくとやってくれているイオン光学系のシュミレーションのお陰です。新しい質量分析器のアイデアをすぐに色々な形でその可能性を検討してくれ、また、世界初の3重極イオントラップの提案もしてくれました。彼は、このイオン光学シミュレーションによる質量分析器の開発研究成果で、この春に学位を申請します。彼が日本にやって来て早6年以上も経つのかと思うと、その時の流れの早さに驚くと同時に、その間ひたすらに突き進んでくれて、今や、世界でもトップレベルのイオン光学シミュレーターとして、どこに出しても恥ずかしくない研究者に育ってくれた事をうれしく思っています。お陰で、質量分析器が設計できる日本でも数少ない研究室になる事ができました。教室にはその跡継ぎがないのが心配ですが、今、そのシミュレーションの結果を基に、会社から質量分析法の勉強がしたくてと門を叩いてくれた吉川君が、その実機を、G a r y 君そして地場の企業の方々と一緒に作り始めてくれています。

ベンチャーHUMANIXも、無理のないスピードで製品開発を進めています。会社も経営しておまえ忙しいだろうと良く言われますが、無借金でSteadyに進めたい自分は、まったくゆったりペースで無理しないことにしています。鈴藤君が中心になって、このグループのみんなのお陰で、昨年川内君がデザインした4眼式の比較培養顕微鏡（写真参照）も改良され、地元企業さんとの共同製作で素晴らしく商品ぽくなりました。更に、筑波産総研に居るクラブの先輩がヒートステージの試験に参加してくれて、みんなの努力の結晶が、新しく真四角なデザインとなって、いよいよ本格的なモニター販売の開始となります。卒業生の皆さんで試して見ようかなと思われましたら、デモ機をお送りしますので、評価して見て下さい。来年2月位からは、出せるのではないかと考えています。

個人的には、今年もやらずもがなの事について発想が広がり、インボルブされる事を自ら作っていることがありました。広島



事がとても気になるのです。

市民球場が、ドームでなく、変わり映えのしない青空球場にしかならないと聞いて、市民のプライドとなる球場をと、安くて、開閉式ドームを作る事は可能だよ、と発想したのが下の図です。高張力に耐える繊維ケプラーを織り込んだ広大な膜を、球場上部にドーム状に形成された梁で4分割されたそれぞれに、ヨットの帆のように引き上げ、雨をしのぐ、この開閉式ドームは、コストが10-20億円で済むでしょう。それなら、広島発の新しい広島市民球場にできると思ったからです。

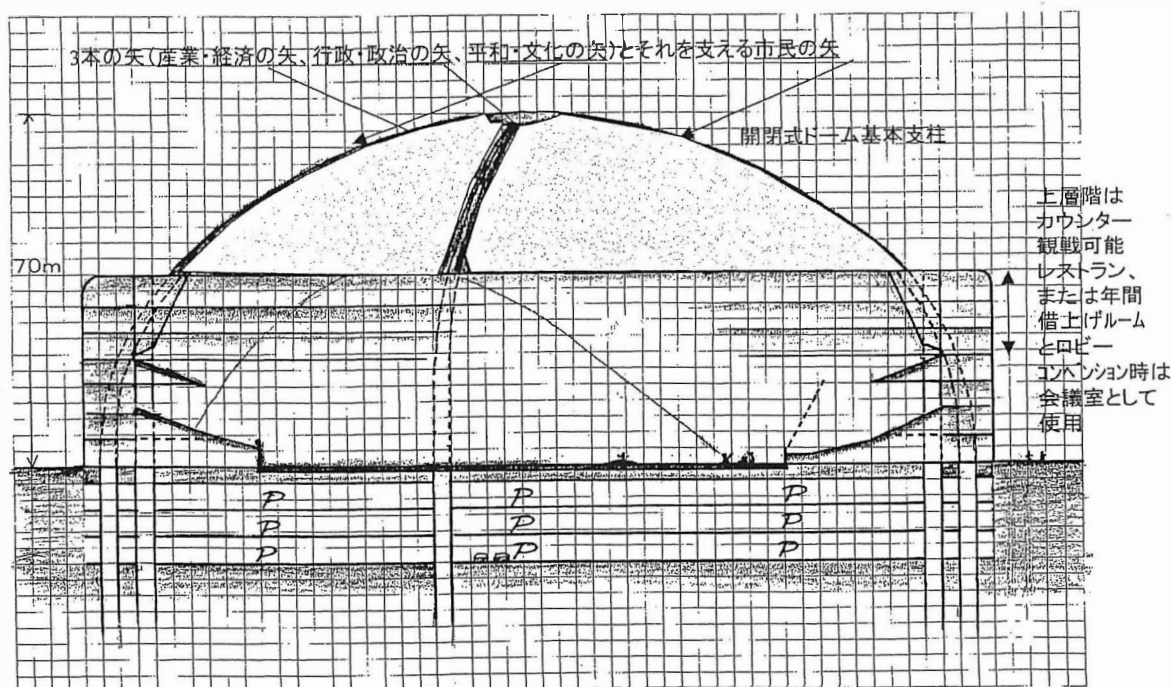
先日、秋葉市長と立ち話ができて、話すと、市長も知っていて、あれは面白い、一緒に会社を作りましょうと言われました。広島市を良くしたいというのは良いのですが、それもこれも気がつくと自分もまわりも忙しくさせています。そして、山田秘書から「先生素晴らしいアイデアが沢山あることは良くわかりますが、この辺でストップ……」と、たしなめられるのです。

僕も後6年、でも僕は最後まで研究での攻めの姿勢は続けます。それが、ここまで苦楽を共にし、この教室の卒業生というブランドを創って来たみんなと、守り続けてきた本質なのだと思っています。最近、製薬メーカーの方々から、先生の教室の学生さん下さいませんかとよく言われるようになりました。そうですね、そういうレベルまで頑張ってくれた子を推薦させてくださいとお答えしています。これからも研究では手をゆるめることはないでしょう。ただし今以上に分かりやすく進めたいですね。

来年が、お互いにすばらしい年でありますように。

平成17年11月 記

超低コスト開閉式ドームの新球場適用イメージ



駐車場は、ヤード跡地では、地上駐車場ののみ、 現在地では、地下駐車場10mまで、それ以上はコスト高

研究室旅行 inスポーツランドTAMADA



緊張のレース直前



ギャラリーも大勢！

鈴藤、お前も開眼したな。



ピースサインの升島先生
(タイムアタック1位)



火花散る最終コーナー



身振り手振りの鈴藤さん(タイムアタック2位)
ちなみに右の方が本当の指導者の方です。